



# 地域医療連携室だより

## 感染制御室だより on-line

こども医療センター感染制御室から、感染対策に関する情報を「感染制御室だより on-line」として年4回の配信を始めました。医療関係者ではなくても分かりやすい内容になっているので、ぜひご利用ください。



## 患者さんのご紹介について

原則として15歳中学生までのお子さんが対象になります。

神奈川県立こども医療センターは、紹介・予約制で診療をしています。

### ご紹介・ご予約方法について

**地域医療連携室宛てに、診療情報提供書（紹介状）を郵送してください。**  
(画像CDがある場合は同封してください)

内容を医師が確認し、受診日を設定させていただきます。

受診連絡票(受診日のお知らせ)を患者さんご家族と紹介元医療機関へ郵送します。  
診療情報提供書の書式は自由ですが、専用ハガキ・封筒もあるのでご利用ください。



## かながわこども医療ネット

(株)富士通 HumanBridge を利用して、こども医療センター電子カルテ情報の一部を確認できます。

### 診療情報の提供



こども医療センター



登録医療機関

### 電子カルテ情報の閲覧

※医療機関のみとは  
限らないため  
お問合せください



## 【当センターフォロー中の患者さんの急患受診】

必要に応じて**医師から当センター担当医宛に電話でご連絡ください。**医師からの連絡が難しい場合は、患者さんから直接担当医に電話連絡をお願いします。



## 病院長就任のごあいさつ

病院長 石川 浩史



日頃より患者さんをご紹介いただいている地域の先生方に、心より御礼申し上げます。昨年度途中より病院長を拝命し、2026年度からも引き続き病院長・病院管理者として務めさせていただくこととなりました。誌面をお借りしてご挨拶申し上げます。

神奈川県立こども医療センターは、1970年に設立された小児専門病院です。医療、福祉（肢体不自由児施設および重症心身障害児施設）、教育（横浜南支援学校）が一体となり、病気の治療とこどもの健やかな成長を支援しています。小児がん拠点病院、総合周産期母子医療センター、アレルギー疾患医療拠点病院としての役割も担い、多職種の専門家によるチーム医療で多様化・複雑化する小児医療のニーズに応えております。

今年度の当センターの病床利用率は80%以上で推移しており、多くの患者さんをご紹介いただいている地域の先生方に改めて厚く御礼申し上げます。一方で、少子化の進行により小児医療の規模は今後縮小していくことが予想され、地域における小児医療提供体制の将来は決して楽観できる状況ではありません。当センターとしては、将来的な医療の集約化の動きも見据えながら、地域の中核的な小児専門病院としての役割を果たして参りたいと考えております。

また、2040年に向けた超高齢化社会と労働人口減少の影響は医療分野にも及んでいます。当センターでも専門職の確保に努めておりますが、採用枠を設けても応募が集まらないという状況が生じています。医療DXの活用などにより業務の効率化を図り、人口減少と働き方改革のなかにおいても質の高い小児専門医療を提供できるよう、県立病院機構本部とも連携しながら取り組みを進めてまいります。

今後も「間口は広く、敷居は低く」を心がけ、患者さんにも地域の先生方にも親しみやすく相談しやすい病院であり続けるよう、職員一同努力してまいります。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお当センターでは、2026年3月から5月まで、PICU病棟に導入するスマートポンプ（自動集中制御・電子カルテ連動の輸液ポンプ）の購入を目的としたクラウドファンディングを実施しております。PICU全ベッドへの導入には約6000万円が必要です。ご関心をお持ちいただけましたら、募集サイト (<https://readyfor.jp/projects/kcmcPICU>) または当センターホームページよりご覧いただけますと幸いです。



最後に自己紹介をさせていただきます。私は2006年よりこども医療センターに勤務し、2008年からは産婦人科部長として診療に携わってまいりました。2021年より副院長として医療情報管理および医療安全を担当してきました。なお産婦人科は2025年より「胎児診療・産婦人科」と名称を変更し、長瀬寛美部長のもとで胎児診療の充実を図るとともに、リスクの高低を問わず分娩に対応しております。今後とも患者さんをご紹介を賜りますよう、よろしくご挨拶申し上げます。

## こども医療センターはどんなところ「診療科紹介」

### 整形外科

大庭 真俊先生に发育性股関節形成不全（先天性股関節脱臼）についてお聞きしました。



#### Q1 发育性股関節形成不全（DDH）〔先天性股関節脱臼〕とはどんな病気ですか？

- A**
- 1,000人に1-3人に生じる。足の付け根の関節の作りが浅く、関節が外れていたり外れそうになっていたりしている状態です。
  - 怪我による「脱臼」と違い、痛みはなく、脱臼していても、立つ、歩く、などの運動発達はほぼ正常です。そのため発見が遅れやすいことが問題です。
  - 歩行開始までに治療すれば、正常股関節に近い股関節への発育が期待できます。
  - 診断が遅延（歩行開始後診断）すると、大きな手術が必要だけでなく、成人期以降も引き続く、股関節の悩みを抱えるリスクが高まるため、早期の診断が重要です。



#### Q2 乳児健診ではどのような点に気を付ければ良いでしょうか？

- A**
- 推奨項目（右表）に当てはまるお子さんは、二次検診（超音波検査、単純X線検査）の対象となります。
  - 家族歴には注意が必要です。「脱臼」としての治療を受けていなくても、股関節が浅い体質のために早く股関節の軟骨がすり減り、「人工股関節全置換術」を受けている身内の方がいれば、リスク因子になります。
  - この基準を適切に使用すると、**全出生の10%以上に二次検診を推奨**することになります。  
適切に実行している自治体では、診断が遅れてしまう症例がほとんどなくなっています。
  - **診断遅延例撲滅のため**、小児整形外科医は、健診でほんの少しでも脱臼を疑ったら二次検診の受診を勧めて欲しい、と考えています。

#### ★推奨項目

1. 開排制限
2. 皮膚溝の左右差
3. 家族歴
4. 女児
5. 骨盤位

1、あるいは2-5のうち2つあてはまったら2次検診へ

一次健診（乳幼児健診）で、推奨項目に当てはまるお子さん（少しでも疑いがある例を含む）には二次検診受診勧奨をお願いします。

（参考：赤ちゃんの股関節脱臼 正しい知識と早期発見のために | 日本小児整形外科学会 <https://www.jpoa.org/news/topics/1585/>）

#### Q3 二次検診はどこに紹介すれば良いのでしょうか

- A**
- 基本的には、同じ二次医療圏内にある施設への紹介をおすすめしております。神奈川県内の二次検診の協力施設のリストは、<https://www.jpoa.org/general/hip-dislocation/hosp-list/kanto/#kanagawa> になります。



## 今、知っておきたい小児医療の新常識

### 「子どもに発達障害（神経発達症）があるのでは？」と心配する親御さんにできること②



児童思春期精神科部長 庄 紀子

#### 乳幼児期の理解と関わり方

- 1 「診断」よりも「関わり方」が大切です**  
乳幼児期に自閉スペクトラム症（ASD）や注意欠如多動症（ADHD）の特性がみられても、成長するにつれて軽くなる場合があります。そのため、3歳未満では診断をしないことが多いです。
- 2 「診断前」から「療育的な関わり」を**  
ASDやADHDの子どもに有効とされている環境づくりや関わりを取り入れてかまいません。**子どもと家族が生活しやすくなる**ことが大切です。
- 3 子どもは「安心できる大人」を求めています**  
3歳頃までに「この人といると安心できる」という感覚を得ることはとても大切です。何かができるようになることばかりに注目しすぎず、子どもの「不快」を察し「快」に変える関わりを意識しましょう。
- 4 乳幼児の不安は「行動」で表れます**  
不機嫌、かんしゃく、拒否などの行動で気持ちを表します。ASDの子どもは感覚が敏感なことがあり、
  - 掃除機や洗濯機などの生活音
  - 服の素材や形状（長袖・半袖など）
  - 抱っこの仕方など大人の接し方などが不快に感じられる場合もあります。子どもの不快を減らせるように**生活環境を見直**してみましょう。
- 5 「不快」の理由が分からないこともあります**  
乳幼児には理由なく泣き続ける時期もあります。泣き疲れるまで待つしかない場合もあります。子どもが泣くことを**自分が否定されているように感じすぎない**ことも大切です。
- 6 「注意」や「叱責」で直るものではありません**  
自分では直せないことを注意され続けると、子どもは次のような状態になることがあります。
  - 大人の言葉を聞き流すようになる
  - 「自分はダメな子どもだ」と思い込んでしまう一方で、乳幼児期に学ぶべきこともあります。
  - 自分のしたいことや欲しいものを我慢する経験
  - したくないことでも、やってみたらできたという経験子どもが「少し頑張ればできそうなこと」を見つけ、できたときには一緒に喜びましょう。**「自分はできる」という感覚を育てることが、乳幼児期の大切な目標です。**

